

《座談会》

同志社のバックボーン

同志社教育の 過去・現在・未来

——出席者——(ABC順)

出石 邦保 (大学商学部教授)

懸野 真文 (野宮神社宮司、昭和九年
高等商業学校卒業)

中村 幸久 (中学校校長)

大下 尚一 (大学文学部教授)

坂本 清音 (女子大学教授)

——司会——

幸 日出男 (大学神学部教授)

バックボーンとは

幸 こんど「同志社時報」の編集委員会から「同志社のバックボーン」というテーマでいろいろと語り合ってみてほしいというお話がありました。このテーマはある意味では非常にわかったような気もするんですが、もう少し考えだしてみますと、たいへんむづかしい問題のようにも思います。

最初にご出席の先生方から、同志社のバックボーンとは何かということについて、このテーマで出席してほしいといわれたときの第一印象といいますか、ご感想を少しお話をしていたきたいと思います。

大下 このテーマを伺ったとき、これなら自由にいろんなことが言えると思ってお引き受けしたわけですが、いざバックボーンということを考えてみるとむづかしい問題です。同志社というのは、骨太のバックボーンというようなものがイメージ的にあまり強く感じられないですね。

同志社らしいというようなことだと、これは一種のイメージがありまして、リベラルであるとか、あるいはあまりあつかましくこと

をしないとか、プラスの面とマイナスの面とがいろいろありますけれども、まあ同志社のバックボーンというようになりなすかと、正直言つてイメージがわからないのです。

これは一つは、校祖新島というものははっきりしているが、新島先生自身は非常に純粹でありまして、福沢諭吉とか大隈重信とか、人間の強い面と弱い面、あるいは世俗的な面と理想主義的な面を兼ね備えながら、長生きをした校祖とちがっています。新島先生は早く亡くなられましたけれども、非常に純粹といえますか、そういう意味では透明なすばらしさというものがあられるけれども、なにか骨太のバックボーンというふうなものにイメージ的に続かない。その辺をどういうふうに受けとめるのか、を考えてみたいと思つております。

坂本 私は編集部の方からお電話いただきましたときに、同志社のバックボーンとおっしゃったから、「それじゃキリスト教で新島先生のことですね」とパツと言っちゃったんですね。そしたら「いや、もう少し幅広く考えてほしい」と言われたんですね。私の考えでは、少なくとも女子大学の空気の中心

には同志社のバックボーンは新島精神であり、キリスト教に基づく人間教育であると直截に言い切つてもおかしくないという思いが、まだキャンパス内に色濃く残っていると思つものですか。

出石 お話がありましたときに、この会に出るのは不適切じゃないかというように最初お答えをしたわけです。私の場合には、私個人の教育は戦後ずっと同志社で受けておりますもので、ほかとの比較ということ、ちょっとその点がむづかしいと思つたんですね。またむづかしいということの一つの意味は、さきほどからも少し出ておりますが、ひとつの形というものをとるというのではなくて、非常に精神的なものですから、みな一人一人が思い思いの形で、たとえば良心を手腕に運用する人物を教育するんだと。良心というものは本人が持っている問題なんです。ですからそれは画一化された何かがあつて、それによつてみな動いているのではない。

ですから何か一つのパターン化して、こういうものが同志社のバックボーンですよというものが非常に言にくいのが、逆にいえば同志社の特色ではないだろうかというふう

に思います。というのは、いろいろの考え方の方をこの大学ほど受け入れている大学も少ないのではないのでしょうか。

中村 私も最初お聞きしたときは坂本先生と同じように、キリスト教とか新島精神というものが出てきたんですね、それでなして、わざわざバックボーンという言葉で聞いかけられているその意味を考えますと、やはり理屈っぽいですがあくまでバックボーンは、バックボーンであつて、表の看板とは違ふもの、しかもその人自身というか同志社を支えているもの、そういう隠された骨ですね、それが何かあるんじゃないか。もちろんキリスト教とか新島精神というものと無関係ではないでしょうけれども、もつと違つた表現で、あるいはもつと違つた形でみながらアピールできるような、そういうものが何かあるのではないだろうかということを考えて考えてみたいと、そう思つたんです。

私自身と同志社とかかわりの中で感じたといひますか、手にふれたバックボーンですね、そういうものはいったい何であつたかということを考えてみたい。

私自身は生まれ育つて教育を受けたのがほ

とんど同志社とは無関係、キリスト教とも無関係なところで育ってきた者ですが、それが偶然の形で、今はなくなった定時制の同志社商業高等学校で学んで、その教師をした。それはなにか同志社のバックボーンからちょっと外れたところにいたような気がします。つまりまったく無関係のところから、やや同志社の亜流のところに位置してつぎに、よきにつけ悪しきにつけ同志社の本流のような学校にいつのまにか入り込んできた。そういう中で自分が感じた同志社のバックボーンというものを考えてみたい、そういうふうに思っています。

懸野 さきほど来、諸先生のおっしゃいますとおりでございまして、バックボーンが太い、細いという問題になってきますが、昔の同志社はバックボーンがもう少し太かったと私は思っております。

われわれの学生時代は街へ出て横着しました。四条通りでいろんな試合の帰り道、酒を飲んでけんかもし、いろいろやりました。うしろ姿で学校が判りました。市民も暖く見守ってくれました。そういうところが最近はいわけですね。非常におとなしく、なにか

小さくなっていていっているというように感じます。

これは、卒業してからの就職関係がだいぶはたらくと思います。同志社の卒業生はだいたい就職先が商社ですから、商社マンらしいものを学生時代から身につけておる。ちょっと優しきがあるというのですか、そういうところがございまして。私は同志社のバックボーンというのは、これは考え方によってはもう少し太くしてほしいと思っています。しかしこれは、どうも昔からの同志社のひとつの流れでしょうね。

幸 いろいろお話が出ておりますが、ほかの学校などで、その学校のバックボーンというようなことをかなり押し出している場合があるのに対して、同志社というのは自由というのでしょうか、なにか統一したようなものがない。どういのが同志社らしいのかというあたりも、またわかったようでわからない。わからないというのが、筋が通ってないという面でわからないとすると、これは困ったことだということになるんですが、よく言えば非常に多様で、いろいろなものがあるというようにも言えるのではないだろうか。なま

じ統一してこれだというのがないところが特徴ともいえるのではないだろうか。

よくバックボーンという言葉が日本の近代史などで使われるのは、明治政府が富国強兵策で、遅れている日本が西洋に追いついていかななくてはならないということで政府自身が教育に非常に力を入れて、教育のバックボーンを強調した。しかしそのような政府のいうバックボーンが第二次大戦後批判されているわけですが、とにかくそういうような政府の教育ということの強調に対して、新島が同志社を設立する。そういうなかで、政府がいうバックボーンと違うバックボーンを強調しようとしたともいえるとも思うわけですね。

新島は、たいへん早く亡くなりましたが亡くなったあたりから教育勅語が出るとか、いろんなことが出てきまして、それこそ教育のバックボーンということがとくに強調されるようになってきたわけですが、そこあたり同志社の百十年の歴史を振り返って、公教育との関係とか、日本の社会情勢全般との関係というようなこともいくらか考えてみる必要があるかと思えます。

それでいま新島精神とか、創立精神あるい



出石 邦保 氏

は建学の精神ということが出ていますが、さて新島精神、建学の精神とは何でしょうか。さつき坂本先生おっしゃったように、キリスト教とこう言ってしまうばかりにそうなんです、そう言い切れるようでもあり、またそうでないようでもあるというようなことも思うのです。まず新島精神とはどうとらえたものでしょうか。そしてそれがバックボーンを形成しておるのか、それともバックボーンにはなっていて、絶えずあこがれるような形でだけ語られるものなのか。そこらあたりは先生方、どうでしょうか。

出石 私は不勉強なんです、「大学設立の旨意」をこの前も一回読んでみたんです。そこでちょっと感じたことは、やはり新島翼

が一つあります。それからもう一つは、当時の大学というもののイメージは、やはりエリート教育だったわけです。それに対して、広く人民の中へ入って全体のレベルをアップさせるということを考えておったのではないかと。教育は百年なんだと言われておるようなことです。そのときそのときの時流に合ったような教育は全然考えてない。長い日本の発展のなかで支えになるような人間をということですから、そこでだいたいじなのは一人一人が自主自立の考え方を持つことだ、またある意味では相手の立場を認めるという考え方が必要なんだと、そういうところあたりのベイスにキリスト教主義なんかもってきているんじゃないか。

たとえば、こういう話があるのですが、卒業生が各会社へ行きましてね。わりといろんな大学のいわゆる学閥ができるわけですね。慶応とか早稲田とかはかなりまとまりがよい。それにひきかえて同志社は必ずしもそうではない。

何かグループをつくったりするのはあまり得意でないといえますか、むしろそういうことをしないような形になっているのではない

か。体育会系のクラブでも入ってくる人は拒ばないし、やめる人は、はやめさせる。

中村 いま出石先生が言われたことに関係あるのですが、新島先生のいわゆる学生生徒に対する処遇の問題がありますね。徳富蘇峰の問題とか、あるいは自責事件のときの個人の生徒へのかかわりとか、ああいうもののがやはり今でも「あ、これは同志社らしいな」という言葉がお互いの間で確認されるといいますか、言われるような場面があります。教職員それから生徒、卒業生も含めて個人の意思といえますか、これは結局自由ということになると思うのですが、そういうことに非常にこだわるのです。いま言われた会社なんかでも学閥ができていくというのは、それ以前につねに個人の意思というものの、同志社という形で一括してしまわないでそういうものにこだわるから、ある意味でなにか固結心が弱い。

ぼくはあまり知りませんが、ラグビー部なんかの話を聞いておっても個人というものを非常にたいせつにされているようなところがありますし、具体的に中学校の中では、生徒にある問題があったりしたら、その生徒



懸野 真文 氏

個人に対してとことん手を差しのべていってやるろう、そういうものが今でも伝統としてあるし、それあたりはキリスト教ともつながっていくでしょうけれども、具体的な問題として非常にたいせつな問題ではないか。それはやはりまだ同志社らしきとして生きているというふうには思うのですけれども。

懸野 私はロータリークラブの中で会社の代表者なんかと話しておりますけれども、同志社ファミリーという言葉を使いますが、われわれのロータリークラブでも二十人ほど同志社出の者がおりますけれども、やはり一つの家族のようにやっています。ここに出ております同志社のバックボーンは家族だというような意味合いに私は変わっていったるように思うのです。新島先生の創立の

ころには、たしかに同志社はキリスト教教育によって徳育ということに重きを置いた、それがずうっといまだに流れてきておる。家族的な面で流れてきておると、感じるわけでございます。

坂本 私にとってバックボーンというのはもっと精神的な霊的なもので、それが新島精神にもちろんあったわけですね。私は女子部しか知らないんですけども、その女子部の歴史の中ではずっと残っているような、だからバックボーンが太いとか細いじゃなくて、そういう精神あるいは霊的な空気が濃いか薄いかという感じでとらえるんですね。今なら女子部にはまだかなり残っているけれども、こんど田辺に行くことによって、場所が広くなり遠くなるそれが薄くなるのではないかと、どうしたらその濃さを保てるかというふうには私はとるんですね。さっきおっしゃってたファミリーというのはもう少し違って、やはり一本筋の通った、支えになるような、しかも霊的なものというふうな感じがするのです。

大下 その辺もう少し、坂本先生から伺いたいと思うんですね。新島先生は、中村先生

がおっしゃったようにほんとに個人個人をたいせつになされた。これは新島精神の教育の原型ですね。ところで新島先生は、やはり非常に個性的な性格というものをもっていたし、新島の弟子たちも蘇峰にしましても、みな個性的な人間だったわけですね。ですから、非常にはっきりした個性があって、それと同志社の広い意味での教育の伝統が一体となって、初めてバックボーンというような具体的なイメージがわいてくるのですね。どうもそれがなくて、同志社らしい何ものかだけで物事を考えられるかどうかというところに、よく言いにくいんですけども、こだわっているわけなんですね。

坂本 よくわかります。私も実はこんど徳富蘇峰の『新島襄先生』を読み直したんですが、蘇峰の個性が新島先生の個性というか、信仰にぶつかり、触発されて、蘇峰の後の生き方を決定したと思いますし、私自身のこととして考えてみても、さっき女子部の霊的なものと申しましたが、それは、例えばデントン先生という人格を通して、また、私が学生の頃は、瀧山徳三先生が学長だったんですけど、瀧山先生の生きざまを通して同志社精神



坂本 清音 氏

が伝わって来ています。たしかに具体的な人間というのは頭にありません。しかし、具体的な人間を通して伝わり、繋がりが広がるのは、やはりスピリットじゃないかという感じがするんです。私の場合、感性でものを捕える傾向が強いのかも知れませんが。

幸 新島襄がどういう学校をつくりたいと思ったかということ別に、こんどはその学校に初期に入ってきた人たち、特に熊本バンドなんかの連中が入ってきて、同志社の空気というものをつくっていく。それからまた新島襄の亡きあとを受け継いだ人たちのいろんな個性とか、そういうものがいろいろあって、同志社の歴史というのもこれは一本の筋の通った歴史というよりも、かなり多様な歴史があったのではないかと思えますね。

ただその点では、同じ同志社といってもたしかに女子大、女子中高を含めて、女子部の場合には何か一本統いているような印象は強いですね。そしてまた現在もそれを受けとめてやっていくという、そういう空気が強いですね。

坂本 こんどの田辺のチャペルの問題でもそうなんです、遠くなるのだから毎日のチャペルをなくして、あるいは、チャペルの時間をお昼休みに組み入れて、終業時間を早めようという意見がかなり強く出されたのですが、回を重ねて話していくと、やはり、こちらと同じ形でとりあえずチャペルの時間を持つという案がとり上げられ、教授会で投票すると、半分以上の票が集まって伝統が保たれるのです。

宗教教育について

懸野 いま宗教のほうの教育はどうなっているのですか。神学部以外の各学部でキリスト教的な精神講話とかはなさっていられるのですか。

幸 大学の場合はいちおう正課の科目としては、宗教学という科目を設置しておりま

して、同志社に入った学生はどの学部にかかわらず、これだけは取っていただきたいということと一年間やっています。タイトルは「宗教学」ということになっていますが、もちろんこれは同志社のキリスト教主義ということに基づいての科目で、ですからキリスト教の中心をお話をするわけですから、ただ大学の学生に一方的にキリスト教の教えを押しつけるということではありませんので、キリスト教を中心にして宗教というもの全般の理解を深めていただく。それを信ずるかどうかということはもちろん各人のことですから、宗教とはどういうものかという基本的な理解はもってもらうようにしたいということ、やっております。

戦後の新制度になって全部の学部が必修という制度にしておりましたけれども、その後一九七〇年前後に、学部によりまして若干ご意見がありました。ぜひ取ってもらいたいこと、制度として必修ということ、取らるのはどうかと、こういうご意見が出たりしました。私の意見を率直に申し上げます、やはり同志社のいちばん中心のことで



中村 幸久 氏

から、これは必修にして、全学生これだけは取って下さいよと言っていいのではないのか、それが同志社の進み方ではないかと強く願っておりますけれども、しかしさきほどからも同志社はいろんな意見があるというお話も出ましたが、そういうことで学部によりましては必修ということには今はしていないという学部もあるわけです。ただそういう場合にも、ぜひこれを取るということによって一生懸命に勤めるということは、必修制度をはずした学部の先生方もしてくださっていると思います。

正課以外としましては、チャペルアワーがあります。チャペルアワーはまったく大学の場合は自由しております。大学以外の学校ではかなり出席を義務づけるようにしております。

れると思います。

その他宗教部講座というのがありまして、これも自由に参加していただく。こういうことが大学がいまやっていることなんです。

懸野 私らのときは水曜日の第一講、第二講は必修科目になっていて、バイブルの朗読と説明ですね。それに出なかったら進級できなかったです。バックボーンがいろいろさきほどから問題になっておりますけれども、キリスト教精神というものを同志社のバックボーンにするならば、また学生に植えつけるならば、宗教学を選択科目にせんとやはり必修科目にしてやれば、私は同志社のカラーがもつとはっきりしてくると思うんです。学部によっていろいろな意見があると思いますよ。

大下 いまの問題ですけれども、大学紛争のときのように大学の中の問題が考え直されたとき、同志社といえども積極的に学生の自由をたいせつにして、宗教学を必修でなく選択にしようという声が出てきた。これも、ひとつの同志社的なよさかもしれないですね。クリスチャンの先生の中にかえてこのよな声が出てくる。しかし、同志社なら宗

教学を必修にしてなにか悪い、そんなこと文句言う人は同志社人やないというような、一種の骨太さというようなものも片方にあると思います。それと同志社のリベラルな面というものが共存しないで、リベラルな面だけが広がると、どうなんだろうね、いわゆる同志社のバックボーンというものが不明確になっていくような気がする。

ぼく自身の好みからいうと、上から何でも強制するのは嫌いなんですけど、それだけにそんな弱いことではだめだ、徹底的にもっと強うやれというような面が、どうも同志社は少なすぎるという感じがしましてね。

坂本 このあいだ御殿場でキリスト教学校教育同盟の夏期研修会に参加しましたときに、同志社大学の卒業生の人が発言されていて、「同志社大学というのはキリスト教学校といいながら、宗教学は自由で、礼拝出席も数が大層少なくてあれでどうしてキリスト教学校といえるんだ、もっときちんとしてほしい。」ということをおっしゃっているんですね。その方は、そういう状況の中で同志社大学を卒業されたわけですが、実際に現在は、聖書の先生として、キリスト教教育に燃えて



大下 尚一 氏

いらっしやるんですね。だから私、同志社大学って、不思議なところやなと思って聞いていました。

それに較べると、女子大学は、かなりきちんとキリスト教教育をしていると言えます。女子大では、まず正課として「聖書」という授業があります。日本中の大学を探しても、「聖書」という科目はないということが、よく教授会でも話題になるんです。たとえば、「キリスト教」とか「宗教学」という名前に変えさえすれば、一般教育科目の単位として認定され、学生の負担が少なくなるという意見です。しかし、この件に関しても、投票で決めるとなると、「いややはり『聖書』のまま残しておきましょう」ということになって、文部省が決めた単位外の必修科目とし

て「聖書」が一年から三年間あります。この科目が設けられた当初から、単に学問として客観的に聖書を教えるだけではなく、キリスト教信仰の規範としての聖書の意義を説くという意図が含まれていたようですし、担当教員も按手札を受けた方というのが条件にあるとも聞いています。

その正課以外に、毎日のチャペルアワーが一講時と二講時の間に二十分間ありまして、それは一回生の前期一週間と後期一週間だけが義務ということで、あとは自由でできるだけ参加するようにというふうにしています。

それ以外に春と秋にリトリート（修養会）があります。最近では学生が実行委員会をつくって、プログラムに企画し実行するようになってから、常時、学生教職員合せて百二十人から百五十人の参加があります。近頃の若い人は、生とか死とか神とか愛とかについて、日頃真面目に話すのは苦手のようですが、こういう機会には安心して大いに語れるようですし、次回は単に参加するだけでなく、実行委員になって企画し、その体験を通して積極性やリーダーシップを身につけていくわけです。

このあいだも、キリスト教学校教育同盟の会合で、題は「現代に生きるキリスト教学校——内なる改革を求めて——」というのですが、パネラーとして話された他大学の先生の話を聞いていて、女子大の宗教活動は、他大学に決してひけをとらないと確信しました。もちろん、これにはこれまでの諸先輩の努力、及び、それをよしとして下さる現教職員の方々の協力なしにはあり得ないことなのですが。

また、その会で卒業生の方が、同志社大学が日曜日に入試するのはけしからんと仰言っていましたのでお伝えしておきます。まあ、隣りにいる者としては、こと宗教学教育に関しては「同志社大学のようになくてはならぬ」と、同大を反面教師にさせて貰っている節はありますが。

出石 たしかに坂本先生のおっしゃるのは行き方の一つだと思うので、単に知識を教育することと違うと思うのです。この学園がそういう雰囲気を持っている、それに学生諸君がふれていく。それで何かのときにやはりキリスト教のそれを思い起こす。長い人生に少なくともそういう時にふれられるような状



氏 日出男 幸

況をつくっていくという形でもいいと思うのです。ただ必修科目にして、いやな思いだけして、あれがあかんかったから卒業できなかったとか、そういうことだけをイメージするのではなくて、宗教学も大いに取りなさいという形で多くの人が自発的に取るようにさせて、いろんな機会を通してキリスト教にふれるということですね。

私はポート部の部長をしておりますので、このあいだも進水式をするのに、宗教部の先生方をお願いして、祈禱をしていただいているわけです。卒業生も三、四十人來ますし、在学生も入れて七、八十人寄るのですが、そのときに聖書をもとにしていろいろお話も聞かしていただくんですけど、私はそれはポート部の部員はおそらく一生忘れないだろうと

思うんです。短いわずかのことですけれども、折にふれてそういうものを与えていくといえますか、それもだいいじやないかという感じがしています。非常にいいお話を聞かしていたできますので、私自身もむしろそれを楽しみにして伺っているんです。聖書の中にこんないろいろなことが書いてあるのかということですね。実際にポートのことにかかわってお話を伺いましたけど、そうするとみんなは、そのときそのときに受けたものというの大きな印象になりますのでね。

中村 中・高全体の様子も含めてですけども、礼拝とさせていただいた毎朝、これは場所の関係で一日置きになっている学校もあるんですけども、うちの学校は毎朝わずかな時間ですけども礼拝をしているのと、それから聖書一同志社高校ではキリスト教学と呼んでいますが、必修科目で週一時間の授業をやっております。

実はうちの学校の具体的な問題でみましても、毎朝の礼拝はだいいじやないかというところのお話ですけども、やはり相当いろいろ批判もあります。第一、生徒の中からは礼拝のために朝早く起きんならんということで、そ

れにつれて先生も早く起きなくてはならぬ。あの礼拝がなかったらと朝、寝間の中で思うとたまらんとというような変な礼拝になる。

ですから礼拝を一日置きにしたらどうかとか、あるいは旧態然と讚美歌うたってお祈りして聖書読んで話して、何とかならんのかというような話が出てきたりもします。そのときに、その旧態然とした毎朝の礼拝にかわる、いま出石先生がおっしゃったように中学生段階で心に残るそういう場所が、あるいはそういう時間がほかに何か違った形でできればいいけれども、それがないうに安易に、朝ちよつと寝られるから礼拝を半分にしようとか、それはいかんと思うのです。

卒業生なんかで礼拝で聞いた話を具体的に覚えてるのはたしかに少ないです。結局同志社中学校で何が印象があるかといったら、朝の礼拝だということです。もちろん授業で習ったことも彼らの血となり肉となつて動いてるんですけども、そういう頭の中に残るのでもなしに心の中に残っていくということが、これがやはり宗教教育の非常にだいいじやないか。

少し前のことなんですけれども、同志社中学を出て、同志社高校を出て、そして医学のほうをやりたいというので国立の医学部を出た。インターンを終わった段階で、大学に残るか、あるいは地方の医師になっていくか、その選択を迫られたときに自分は聖書の言葉を思い出したというですね。クリスチャンじゃないんですけどね。結局いま自分が待たれているのはどっちの場所かということを考えて地方を選んだ。これはほんのそのときだけで、その聖書の言葉はまた消えてしまってもわかりませんが、やはりそういうものが何かあるんじゃないかと。だからその生徒にとっては、中学時代は眠たいから礼拝がなかったらいいのと言っていたひとりがかわかりませんが、それから七年後、八年後、十年後にそういう形で彼の中に芽生えてくるものがあるんじゃないか。そういうものを植えていきたいと思います、それがバックボーンというのですか、その辺のたいせつさはだいにしていきたいと思いますのですけれども。

一貫教育

幸 同志社といっても、同志社内各学校

でそれぞれのやり方があるわけですから、もしかしきずれにしても、その学校なり何にかキリスト教主義の教育というものをきちんとやりたい、ということは共通にあると思います。ただその学校のこれまでの歴史もありますし、学生生徒の発達段階ということもあるでしょうし、あるいは男女共学か女性だけかというようなこともあるかと思えますね。そういう点で一貫教育というような言葉がよく同志社で使われるのですけれども、いちばん中心になるはずの宗教にしまして、一貫しておるといえばしておるのですけれども、やり方とか対応とかいうことになる、はたして一貫といえるかというような違いも出てきておるかと思うのです。

中村 教育の一貫性ですが、大きく分けて教育の内容での一貫性と、いわゆる広い意味での精神教育的な宗教教育の上での一貫性、その辺をやはり確立していくべきじゃないかと思えます。現状についていえば、具体的に中学の問題になると高校との一貫性が、当面の課題になっています。幸い、最近一貫教育委員会もできていますので、そこでその辺をもっと深めていっていただきたいなと思って

おります。

幸 同志社は経営の仕方としても各学校が独立主義というんですか、独立採算というところがありますし、人事などについても、それぞれの学校の独立制ということでやってきて、そういうなかで全同志社としての一貫というのは、これは言うのは易しいんですけども、たいへん難しい問題がいろいろあるのではないかと思うのです。

宗教的な面に關しましても、最近ある大学の先生から聞いたのですけれども、同志社内的高等学校から来た生徒のほうがいかんようにだとの先生はいわれるんですね。たとえばチャペルの出席の様子を聞いてみると、学内から来た学生が、自分は同志社の中学、高校でキリスト教の授業やチャペルはいっぱい聞いた、もう結構です、というようなことを言うんだそうです。もしもそういうことだとしますと、そうならないようにするにはどうしたらいいか、もちろんこれが学内から来た人の全部とは思いませんけれども、そういう空気がある程度あるということも事実のように思うんですね。そこらあたりどういふふうにか考えたらいいのでしょうか。

大下 たてまえからいうと、いま先生がおっしゃったように、中学からずっと、大学へ来たものが率先してチャペルへ行く。こうなると、一貫教育の成果ですけれども、これは考えようで異常な精神構造ですね。熱心なクリスチャンの家の子供でも教会に行くとはかぎりませんし、その辺を具体的にどういうふうに考えるか。

一貫教育の場合に、大学のように、最終の教育を与える場所でそれまでの教育的成果をどう引き出すかということと、それぞれの学校がどういう教育をしてきたかということをもう少し共同して考えないと、両方で責任のなすりつけ合いみたいになる。

坂本 女子大でも内部から来たもの話を聞くと、中学、高校と強制だったから、大学に入ったらもう行かない、自由にしたいと言います。たしかに來ない傾向はあるんですね。だけど、内部から來た子も卒業するころになると、やっぱり同志社はキリスト教だということを思い返して、四回生くらいからまたリトリートに参加するというふうに変ります。ですから一貫教育というときに、同志社の中の各学校、各段階によってバラエティが

あることが、むしろ望ましいんじゃないか、それぞれの学校で一生懸命やってさえいれば、と思います。

中村 それはよく話しているんですけども、教会でも中学生、高校生で來だして熱心なのは公立の生徒ですね。うちの学校の生徒というのは、日曜日ぐらいは礼拝なしにしてほしい(笑)、行かへんという。それはそれでしょうがないと思うんです。

坂本 うちの場合も、公立から來てはじめて入学式でパイオルガンを聞いて、讚美歌を歌って、もう感激した、これこそ同志社やと、チャペルにつながってくれる学生が多いです。それから今うちの場合はクリスチャン学生を推薦学生として受け入れているんですけども、その七、八名の学生はほんとに核になっていろいろ宗教行事をひっぱっていつてくれます。今の所、キリスト教学校教育同盟に所属している高校からだけですが。それは下から上がった子ではなくて外から來たものだという事です。

中村 今も一貫制で生かされていることはそれなりに評価もし、一方でこういうことは問題であるという点は、それはそれでお互い

に批判もあっていいし、その辺きっちり整理していく必要があると思うんです。ただ、大下先生おっしゃったように、お互いに責任のなすり合いみたいなことはかり言うていると、結局生きているものも生きてこないという感じですね。

懸野 先ほど中高で熱心に教えても、大学に入った途端にあかん、またチャペルに行かんらんのかと言うことですが、それは言うても、いずれその子はまたかえって来ると思いますね、長い目で見ていけば。それは自由というよりも、ある程度そちらのほうへ半分くらい向くように指導してもらわんと、どうでもいいというようなやり方では……

たとえば、同志社のラグビー、私、ラグビーの先輩が、正月私のところへ來て、「大八木がおって優勝した次はあかんぞ。」「なぜあかんか。」「練習の仕方がちがうんだ」と。大八木のときまでは全部それこそきつい練習をさせた。それからあと自主練習に切りかえた。それはよい面もある。強制的なことには悪い面もある。どっちもよし悪しはあるけれども、最後の後半に粘りが足らぬ。自主と強

制との差がそこに出てくる。前半どうにかもつれていくけれども、最後に負けてしまう。それが去年あたりからの同志社のラグビー。何が上手になったか、サインが上手になった。女子大生や女の子がサインしてくれ、サインしてくれと言っていて、サインが上手になってラグビーができぬ。だからある程度強制的にやらんとあかんのやということを私の友達に、言うておりました。だから、宗教とか、同志社のバックボーンとか、同志社のカラーを出すというときに、その自主と強制との組み合わせですね。せつかく中高で上げてきても、そこでボンと途切れる。そこを何かうまいこといく方法がありましたら……。

大下 今までは、キリスト教に西洋的なものと結びついたイメージがあったわけですけども、このごろ西洋的とかアメリカ的とかいうものは全く日常化してしまつた。同志社だから英語をよくやっていると、外人の先生もいはいはるといふことでしたけれども、もう宣教師の先生もほとんどおられない。おそらく一部の学校と比べれば同志社は英語のネイティブ・スピーカーは非常に少なくなつてゐるし、事実、英語力も同志社だからよいと

いうようなことはいえない時代になつてきたでしょうね。今まで同志社的なよき、あるいは同志社のキリスト教的な精神がある程度存在し得たけれども、これからはもう少し何かがないと、ますますそれが稀薄になつてしまふんじゃないかと思ひますけれども。

私学としての意味

幸 いま私立学校に対して私学助成ということがなされます。これは私立学校だからといって勝手なことをやっているのでなくて、日本の子弟の教育を担っているんだ、こういうことが私学助成の基本にあると思ひます。これはある意味では私立の学校にとってはたいへんありがたいことで、それがなければ、すべて学費でやるということは大変なことです。それから、これは感謝しておりますが、ただ、そういうこととの関連の中で私学の公共性ということがよくいわれます。公共に反することとはもちろんいけないのですけれども、ただ、公立学校とちがつてわざわざ私学を立てて、苦しい経営のなかをがんばつてやっていると、この意味は何かということが、私は消えたとは申しませんが、うっかり

するとそのところが薄くなつていく危険がいま出てきているのではないか。これは学校へ入りたいという人の数がたいへんふえてきたことがあつて、以前ですと、私学に行くのは、偏差値がどうだからということではなくて、とくに同志社とか、東京では慶応とか、全部が全部とは申しませんが、昔は何かあつた。今は入る者の動機づけも薄くなつてきたのではないか。そういうことで私学というものの意味は何かということですね、これがいま問われなければならないときに來ていると思ふんです。きょうのバックボーンというテーマも、そういう中で同志社は同志社としてどういうバックボーンをもっているのか、あるいはまたなければいかにんのかということが問われているのではないかと思ひます。

出石 難しいことですけれども、国公立大学になりますと、やはりその時の政府とか当局的ポリシーというものとダイレクトに結びついてくるんですね。ですから、たとえば国立大学を見ておられますと、高度成長の前半くらいから工学部にもすごいお金を投入しまして、工学部がものすごく肥大化してくる

とか、あるいは少し文部省に合わないようなことをしておりますと講座がふえないとか、そういうことで直接的な意味でも間接的な意味でも国の政策の影響が大きいと思うんですね。しかし、教育というのは、もっと長期的なものですから、そのときそのときのニーズだけに追いまくられておったのでは、問題があるだろうと思います。私学の場合、研究も含めて、そういうものに追いまくられないような、何かそういうことをやっていかなければならぬのじゃないか。大学の特色としては、それぞれの大学があまり短期的な目標じゃなくて、長期的な何十年か先をもう一度考えて目標をつくっていかなければいけない。今までの延長線じゃなくてこれからどうするかということですね。

幸 中村先生、中学の場合はとくに義務教育ということで、公立に行こうと思えばそのまま行ける。にもかかわらず私学にやってくる、中学の校長先生としてそこらあたりの問題を……。

中村 だいたい京都で小学校を卒業して中学へ入るうちの五割ほどが私立中学へ来ているんですが、最近私立中学のほうの枠がそん

なにひろがっておりますけれども、応募者はずっとふえてきているんですね。ことしの春から小学校卒業生の数が減ってきています。つまり私学志向がすでに中学の段階で強いわけですね。なぜ高い学費を払って中学段階から私学へ行くか、これはいろんな要素があるんですけども、一般的にいわれているのは、大学まで進学しやすい。これがかなり大きいですが、ここ五、六年前くらいからは、結局私学に入れておいたほうが安心である。つまり先生の生徒へのめんどう見がい、いわゆるいじめだとか暴力とか、そういうことが私学にはないという安心感、だいたいその二つ。だから進学の問題が非常にシビアになっているということ、いじめの問題なんかと一緒にって私学志向が出てきている。

これは確かですけれども、それにプラスしたものが最近はかなりふえてきています。それは同志社中学への信頼ということもあるでしょうけれども、進学の問題以外の点での安心さ、プラスいまおっしゃった精神的なもの、中学段階では情操教育といえますか、

そういうものへの期待がここ数年出てきているんですね。こういうことは非常に大切な問題だと思っております。

懸野 私考えておるんですが、校友会とか父兄会がござえますね。私も文学部の父兄会の委員長をさしていたきましたけれども、学校と校友会（父兄会）の間がひとつ一貫性がないのです。これもわれわれの父兄会とか校友会側にも一つは欠点もあると思います。一人の人が何年でもやっている。こういうことは私はいかんと思う。私はロータリークラブへ入っておりますが一年任期でございます。会長になったら一年間全力投球をする。そしてまた選挙をして次の新しい人に譲っていく。それがまた一生懸命にやる。留任、留任ということではなしに、そういうこともひとつ考えていく。

それから大学自体も、どこの大学へ行っても同じことを教えているというのじゃなしに、何か新しいことをひとつ取り入れてやっていただく。こういうことが大学の発展につながると思うんですけれども。

幸 その点、先ほど大下先生が発言なされた点と関連すると思っております。私学として目

玉という世俗的な表現ですけれども、同志社はこれだというものがほしいということをご指摘になっていると思うんですけども、そういう点は大学の学部レベルで大下先生とお考えでしょうか。

大下 なかなか難しい。同志社全体でもっと時代の期待に合う学部をつくるとか、そういうことがあってもいいと思います。もちろん教育というのは長期的なものだし、時代の先取りばかりやっているのが真の学問ではないということもおそらくいえると思うので、その辺をどう考えるかということが大きな問題です。私個人としては、いま世の中が大きく変わろうとしているときなので、既存のものの中でも、時代にどう適応していくかというところをもっと真剣に追究しないといけないと感じています。非常に抽象的なことを申しますけれども。

その場合に新島精神的な学問というのは、問いつめればないわけですけども、しかし、たとえば国際的なものであるとか、人間性を大切にするような立場を学問と結びつけていくとか、同志社的にいて、しかも今の時代にかかわるものはどういうものかということ

とを考えてやっていくことはできると思うんですけどね。

坂本 女子大についていいますと、こんど短期大学をつくったのもそのためなんです。いままでどちらかといえば女子大でリベラル・アーツをやってきたから、短大ではもう少し職業教育といえますか、それはある意味でいまのニーズにこたえるわけなんです、それをしようということでの四月から発足しました。次の段階としていま教授会で二年後をめざして議しておりますのが日本文化学科で、今やわれわれは西洋から受けるだけじゃなくて、日本について語らなければならぬとの観点から、カリキュラムを考えています。しかも同志社が京都にあるという地の利を生かして、もっと伝統的なものを有効に授業の中に入れられるような学科にしようとも考えています。

それからキリスト教学校教育同盟の会合で話されるときに、よく一口にキリスト教主義といっても、各学校によって特色が随分ちがうなという話が出るんです。同志社の場合を考えても、新島先生が抱かれたキリスト教信仰が基になっていることは言うまでもないこ

とです。蘇峰は新島襄と福沢諭吉を比較して福沢諭吉は日本の歴史と同じで、ただ単に取る教育であるが、新島先生は取ったものを倍にして与える教育をめざしている、と何度も書いているんです。その辺を同志社のもつ姿勢としてだいじにしていってほしいんじゃないかなと思うんです。

幸 国際性ということが最近よくいわれるんですけども、国際性とか国際教育というのは、うっかりすると欧米、とくに同志社の場合ですとアメリカとかかわっているのが国際的というような感覚があったことは否定できないのではないかと思うんです。しかし最近はそのとはいけない、アジアの中の同志社ということではいけないという反省が出て来ていると思います。これは同志社の今後の課題ではないかと思えますね。

出石 先ほど女子大の例をあげているんですが、女子大はたしか学生数は二千七百から三千くらい……。

坂本 短大を入れますと三千三百くらい。
出石 大学の場合には、商学部の場合ですと、二部を入れますと四千くらいいるわけな

んです。それが六学部、寄って大学を形成しているわけですが、先ほどのキリスト教教育とかそういうことがありますから、できるだけ大学は一本化してやろうという形でできているわけなんです。ところが組織があまり大きくなりすぎまして、全体としてそれを舵取りするのが非常に難しくなっている。

それともう一つは、先ほどメリットとして言いましたように同志社はいろいろの意見の人を包容できる。つまり、だれかがおって縦で命令してずっといくような組織ではないわけなんです。自由にいろいろの人が意見を出される。どこへでも出てくる。そうすると、それを一つにまとめて大学としての意思決定をしてある方向へ向けていくということについては、これは非常に難しい問題になると思うんです。ですから、大学の場合に限定しますと、これだけ大きくなった組織の中で大学の方針を決める意思決定をどのようにしてやっていたらいいのか、一方でいろいろの意見の人を集めてくるということは、これは私は同志社の財産だと思っんですね。これを失ったらだめである。ですからいろんな人を内包しながら、なおかつ環境の変化に適応でき

るように意思決定をしなきゃならないことなんです。

同志社全体についていいにしても、先ほども一貫教育との関連がありましたけれども、たとえば立命館にしてもどこにしても、高等学校、中学校は附属なんですね。ですから大学と話し合いて行けるんですけれども、同志社の場合には一つ一つがみんな独立の学校なんです。しかもそれが法人として一つになっているわけですね。そういう意味では一貫教育あるいは宗教教育という形でわりあいまとめやすいように見えますけれども、実際に組織として同志社をどうもっていくかということになってきましたら、これは非常に難しい問題になってくると思うんです。

一方、財政の問題にしても、法人としては一本だ、法人がいろんなことを考えるべきだと、これは形式的にはそうです。しかし実際には各学校の校長先生とか学長とかが学費を上げたりそれぞれやっておられるわけですね。ですからそこにも二重構造になっているというところで、非常に平等でうまくいっているように思いますが、他方何か特色を出しているということについては、簡単に右、左と動け

ないような組織機構になっている。ですからいろいろな意見の人を入れていくということは大切なんですけれども、組織の効率性といえますか、そういう観点から見ましたら、同志社大学は非常に非効率な組織になっているんです。ところが一方、一般教育とかそういうふうになりますと、いろいろ先生の授業をみな聴けるわけですから、各学部の完全縦割になっているよりはは講義もいろいろ聴けて非常にいいわけなんです。そのいいものを生かし、組織の効率性をどういうふうに高めていくかということがこれからの同志社にとって非常にだいじなことではないか。各学校の独立採算制の問題も含めて学部の問題も結局そういうものをにらんでいかないと、学部レベルでいくら議論してもどうしようもないということになってしまっている。

だから、どの学部でもそれぞれあいうことをしたい、こういことをしたいということとはいろいろお考えになっているはずなんです。当然そうなんです。しかし全体のレベルにどういうふうに上げていって、まとめ上げるかということになりますか新しいことがやっていけるような状況をつくっていかないと

と、どちらかが伸びていくことは難しい状態になってくるような感じがするんですね。ですから校友会も、言うてみたら校友は中学も高校もみな一本になっていて、それで外から言うているわけですから、実際にかみ合うところが無いわけですね。学校法人と校友会、その中にたくさん学校がある。実際働いているのは各学校ですから、校友会がいくら言うても、法人レベルには反映しませんが、諸学校に行くには一つの障壁があつてなかなか伝わらない。そういう問題が出てくるのではないか。独断かもしれないけれども。

国際性について

懸野 私らのロータリークラブは、東南アジアの学生を、奨学生としてこちらへ受け入れております。それからまた別のロータリー財団という基金をしまして、優秀な学生をアメリカとかヨーロッパの大学へ派遣しております。大学側でこれひとつアメリカへ一年ほどやらしてくれんかというような話がありましたが、遠慮なくおっしゃって下さい。私の方の審査会で決定をいたします。現在、韓国の学生が一人奨学生として同志社大学商学

部一回生としてお世話になっております。今までの奨学生は卒業後それぞれの母国に帰り立派にやっております。日韓友好のためにも学校側によりしくお願ひ申しあげます。われわれのなかで一つの試験のようなものがございます、この人はアメリカへやつてホームステイさせて学校へ通わしてちゃんとできるかということの研究してやっておりますので、同志社のほうからも遠慮なしに言うていただきませう。

幸 大下先生、このあいだアジア近隣諸国の留学生とお会いになっていましたけれども、留学生はどんなお金で来ているのですか。

大下 日本の国費の場合もありますし、自費とか、あるいは援助をどこから得てきているとか、いろんなケースがあるんじゃないでしょうか。ですけれども、いずれも生活はかなり苦しいようですね。少なくとも住居費が高くつきますね。

国際的というのたいへん美しくていいように思いますけれども、こういう時代になると、国際化というのはかっこいいものじゃないに現実に必要なことです。そういう時代の中に生きていくわけですから、大学生生活四

年間のなかで日本以外の国の学生とも知り合うという機会を留学生から得ることが、同志社の学生にもプラスする。そういう意味で、留学生のために少しでも奨学金をつくって日本へ呼んでやろうという考えじゃなしに、留学生のために予算を使うことを通して同志社の国際性がやしなわれてくるという、そういう努力をしていかないと、今までの国際性も失われてしまう。国立のように留学生をたくさん入れる必要はないかもしれないけれども、同志社なりの努力はやはりやっておかないと国際的にならない。

出石 大学レベルでやるかどうかは一つ問題ですけれども、やはり日本語をよく理解できるような機関を同志社にもつべきやと思うんです。そうでないと、受け入れても結局日本語がはっきりしないためにかえつて気の毒なことになる。東京なんかですと、そういうところはわりと整備されているわけですね。早稲田なんかもそういうところをもっているわけです。同志社がほんとにそれをやる気であるなら、ある程度の費用を投入してでもそれをきちんとやつて、語学を一方でやりながらやらないと、私のほうなんか、これから商

学部に来たいという人はわりとおるわけなんです。大学院になるわけですが、そうすると担当の先生が全部個人的に責任をもって、個人の世話からやっているわけです。それでは結局長続きしないわけです。ただ言うてくるから受け入れたということでは、かえって失望させて帰すだけになる。ですから一年なら一年きっちりそこで日本語できるような何かそういうものをつくらないと成功しないんじゃないか。

坂本 女子大のコースに外国人に日本語を教える資格がとれるというのがあるんです。だからそれが育って、同志社の中で生かされたらいいですね。

出石 いずれにしてもそれと取り組まないで、個人的に個々の先生が非常にご苦労なことで成果はあまり上がらないんじゃないかなと思いますけれども。

幸 新島精神とか立学の精神は何かということを議論しだすとときりがありません。しょうけれども、少なくとも一つの大きな特徴として国際性ということがあると思います。新島がまだ国が門を閉ざしていたときに法律を侵してまで海外に渡って、そこで学んで帰ってき

て、世界に目を向けた学校を明治の時代にくったわけで、その伝統を私たちはもっているはずなのです。そういう意味では国際性ということとは非常にだいじだと思わなくていいけれども、いまお話のようにいろいろ難しい問題も抱えております。そしてこれをどう克服するかということとはなかなか決めるににくいようなところがあるので、これはぜひよく考えていきたいと思えます。いまだき国際的とか国際性というだけでは特徴になりませんね。同志社の場合最初からそれがあった。それがほんちに生きることがだいじじゃないかと思うわけです。

それで、出石先生からお話がありました。同志社、とくに大学の場合機構が大きすぎて決めにくい。それからまた同志社全体についても各学校の独立性があつてまとまりにくい。大学だけを見ましても、教職員にいろいろいいアイデアがあるんですね。こんな学部をつくつたらどうかとか、こういう科目を置いてとかいろいろあるんですけれども、個人的なレベルの話では話はずんで、ある程度熱心な話になったりするんだけれども、具体的に新しいことを決めて先へ進むという

ことは非常に難しくなっている。ですからアイデアが出ただけではだめなんで、先に進むにはどうしたらいいかということを考えないと、同志社はいちばん古い私学の一つだから、大きな特徴をもってきたはずだとか、それだけを言っても進まない。何でもただ新しいことをすればいいわけでももちろんありませんけれども、ほんとうにだいいいな新しいことをどういうふうにしてやっていくか、やっていけるようになるかということが大切なことです。

田辺キャンパスの問題

出石 大学としては田辺にそれだけの投資をして、それを返していかなければならない。いまの時点では、学部を充実したいけれども、とてもじゃないがそこまでいかなのじゃないか。だからなんとか早く田辺を含めて経営基盤をはっきりささねばならない。これはいまの法人の理事会のほうでお考えを出してくれるようになっておりませんので、大学がその中で考えなければならぬので、それはどうしても片づけなければならぬ大きな問題です。

ですから、新しいものをどんどん入れたらいいと言いながらも、片方で田辺をなんとか成功させないといかん、そのための経営基盤という問題もこれからわれわれ全部が背負っていかねければならぬわけです。ですからその意味ではいまだいじな点に立っていると思います。ここで財政的に下手なことをすると、前進するどころじゃない、維持するのが大変になってくるという感じがします。そういう角度から大学のほうでもっと考えていかねければならないという感じがするわけです。ですから、それぞれが一生懸命に自分の学部をよくしたい、自分のところをよくしたいと考えているんですけれども、それには裏に必ずお金が伴うわけです。もしそれを積算していったらものすごいお金になる。そうするとこれはいまの同志社の赤字から考えたらとてもやっていけないことなんです。ですからかなりリーダーシップをとっていただいで、田辺の問題をできるだけ早く解決するよな方向を打ち出さないと、しかも数学のレベルを下げていくやり方で何かを考えなければならぬということになってくると思います。

幸い田辺のお話が出たんですけれども、同志社はいま以前に田辺に相当広い土地を買いました、まず国際高校が田辺に開校した。そして同志社大学と同志社女子大学がこの四月から田辺に行く。大学の場合には一、二年生の授業、それから女子大の場合は短期大学をつくって、短期大学が田辺へ行く。それとも一つは音楽学科が全部田辺へ行く。そして女子大は具体的に先の計画を進めておられる。大学の場合は先をどうするかというのはまだ今のところないわけです。これは早急に考えていかねければならないわけですが、そのことはそのこととして、大学・女子大それぞれ一つの学校といながらキャンパスが分かれる。出石先生ご指摘のように、それぞれの学校が独立していて同志社としてのまとまりをどうするかという大きな問題がある上に、大学・女子大はそれぞれまたキャンパスも分かれた。同志社全体として見ましても、今出川と田辺、それから高等学校が岩倉にありまして、男子の高校・中学が香里にある。ですから同志社として五つの校地、キャンパスをもっているわけで、場所が離れますと、うっかりすると地理的なことで

疎遠になりやすい。同じ学校といいながらまとまりが難しくなるということもあると思うんです。そういうことで、精神的な統合といえますか、キャンパスのつながり、これはどうしたらいいか。とくに大学・女子大にとってそこあたりどうするかという問題があると思います。

坂本 大学に較べて、規模の小さい女子大が二つに分れてどうなるだろうかという心配は大いにあります。そこで、田辺移転前から教授会でそのことについて何度も話し合われました。その結果、たとえその方向を選択することにより不便になったとしても、両キャンパスの交流を積極的に進めようと決められました。短大と女子大及び学科内での教員の交流、田辺に研究室を持つ先生の数は幾人が妥当か等々、今、二年後の一、二年次同時移転を目指して真剣に考案中です。

それとも一つ、これはやや副産物的であり、一部のものだけの思いかも知れないのですが、チャペルを田辺でも同じ形態で持つた結果、およそチャペルに座している時には、他方のキャンパスのことを考えるというのが習慣になりました。祈りとしてそのことを声

に出して言うこともありませんし、言わないこともありますが、同じ時間に同じ目的の時間を持つことによって、心を合せることが出来る、ものすごく精神的なつながりになっていることが分ります。このことは本当に思いがけなかった恵みなのですが、この精神的一体感を基にして、両キャンパスに二分されざるを得ない女子大の教職員間の交りのための企画も生み出すことができるのです。

大下 専門教育につきましても私の立場は楔形ということで、専門科目を一、二年におろしておりますので、それで私も田辺で授業はやっております。私が田辺に関していちばん感じることは、キャンパスというものは、やはりそこに定住して、そこで研究をし教育をする人がおらないとだめだということです。そこへ授業にだけ行って帰ってきたのではキャンパスにならないだろう。そういう危惧を今の時点でももっているわけなんです。いまのところ学生諸君の出席率もよくて賑やかで、表面的には今出川よりも田辺のほうが活気があるような状態ですけども、やはり先生がそこにいて、学生が先生を訪ねて行ったることができるような状況が必要ではないか、われ

われはこっちの研究室にいて、一週間に一べん向こうへ行つて、授業が終わつたら帰つてくるということではたしていいのかという感じがいたします。これから考えていかなきゃならん課題の一つだろうと思います。

幸 それは全く同感ですね。表面的には田辺には新鮮な雰囲気がある。しかし多くの教師にとっては、嘱託講師のように行つて帰つてくるということですね。何年かたつてきますと、このような形ですむかどうか非常に大きな問題だと思います。

大下 同志社全体がいろんな問題を抱えているけれども、いまある中でどこかで情報を上手に管理してといえますか、用いながら、全体で同志社がいろんなことができるようなことをもう少し考えていいんじゃないかと思えますね。そうしたなかで広い意味の同志社のバックボーンというか、そういうものができていくんじゃないかと思えます。学生は女子大と大学と一緒にクラブをやったり、案外いろんなつながりがあるんですけども、むしろ教職員のほうがいろいろつながりは難しいようです。国際的プログラムや宗教教育では、協力してやるのがいくらかもあります。

坂本 女子大の中でよく話しているんですが、せめて同大との間で一般教育科目の単位交換ができればと。

先生方よくご存知の、アーモスト界限の五大学協定のプログラムの中で、スマス大学は女子大でありながら男子学生が数名クラスに混じっていましたが大変うまくいっていると感じていました。しかし、女子大から同大へ行かせて貰う場合はいいとしても、女子大に同大生が何人でも来ていいというわけにはいかないだろうし。今度、女子大キャンパス内に新島記念講堂もできることだし、チャペルには自由にお越し下さいということで交換ができるといいのにと、個人的には考えています。

大下 それは大賛成というか、私は女子大に講義に行っているときに、なにもわれわれが行かないでも、アメリカなら女子大の学生さんがこちらにくる。そういうことはいくらも行なわれている、と言つてくれます。

坂本 一貫教育委員会あたりでは是非具体案を考えて頂けるといいですね。

中村 それともひとつ突っこんで、人事の交流ということ同志社の中でもう少し考え

て、いくべきではないでしょうか。いろいろ難しい問題があるでしょうけれども。

それからキャンパスの問題について、田辺については中学はいま直接関係はないんですが、香里もそうですけれども、香里の場合、たまたまその地にあった学校との合併。田辺の場合は、今出川が狭いからやむをえず向こうに開いた。そういう形でそれぞれのキャンパスができ上がっていつているんですね。この段階になったら、それぞれのキャンパスの意義づけといえますか、特色といえますか、田辺はこういうキャンパスなんだということですね。たまたま国際高校は場所がないから最初に田辺にできて、女子大はいっぱいだから向こうに、大学はいっぱいだから半分向こうに行つたと、そういうところにしからずがないという感じですね。その点、同志社の田辺のキャンパスはこういうキャンパスであり、こういうゾーンなんだという、そういうものが今後つくられていって、それが香里においても岩倉においても形成されていっただらということを思うんですけれども。

幸 キャンパスの特徴ということですね。一つは同志社としての一貫性とともにも、各学

校に特徴があったらいいということ、こんどはキャンパスもそれぞれのキャンパスに何か特徴があつて、全体としての同志社の一環なんだけれども、そのキャンパスの特徴というものがあつたらいいということでしょうね。

中村 そうです。大学なんかいろんな悩みがあるなかで結論としていまの形におちついているんですから、これは容易なことではないとは思ふんですけれども。

教育と自由

懸野 私は先程烏丸の西門から入つて来ましたが、机を針金でくくつてバリケードがしてありますね。学校は夏休みですが、田辺のほうのキャンパスはそういうことはないだろうとは思いますが、そういうことの対策を考えておられるものか、こういうことも私は大切なことやと思います。

幸 大学の場合、以前からの経過をいろいろ背負っているところもありますし、考えていかなければいかんとは思っていますけれども、これもよくいえば同志社はいろんな学生の自由を重んじて来たという面もあるわけ

で、それは全部よかつたともいえないでしょうけれども。

出石 看板がごいますね、あれなんかも外から見たら、なんで取り除かへんのやということになりませうけれども、これは一つの意思表示として学生が一応出しているというふうに見えているわけです。学生はある時点で何かしても、教育というのは長期的なものだからという気持ちでわれわれの中にありますので、すぐあれはいかん、これはいかんという形には同志社の中ではどうも難しいと思つかけです。

それから体育会というのがございますが、スポーツといつても五〇くらいの部があつたと思います。いろいろのクラブとか体育会系の部が活動しております、新聞に出てくるものとなりますと、ラグビーとか野球とか限られたものになるんですけれども、実際毎年関西あるいは日本で一二というのがかなりの数上がっておるわけです。ですから同志社の場合、関西四大学の中ではスポーツに関してはいちばん活発にやっているのでないか。それ以外にサークル、部外連というのがありますし、そういうものを入れますと、かなり

の人数じゃないでしょうか。

同志社の場合、たしかに勝つということも
だいいじですけども、負けても勝ってもそれ
は一つの教育だと思っただけです。やはり自分
のものにしてもらわれないと意味はない。もち
ろん勝つにこしたことはないと思っただけです。
しかし努力をして負けたら、これは仕方がない
と思っただけです。その点ラグビーなんかの
場合は勝つことが宿命みたいなことになって
います。OBの方も大変だと思っただけです、
私のお世話しておりますボート部も、かつて
はかなりよかったですけれども、最近ちょ
っと成績が悪いので、OBの方にも心配して
いただいているんですが、まあスパルタ式に
とにかく追いまわってやるという、そういう
スポーツではないと思っただけです。来る人は拒
まないし、去る人は追わない。できるだけ個
人の自主性を重んじたやり方をするというの
が、ほかの大学と比べてほしい同志社の特
色になっているのではないかと。だから一見ひ
弱に見えるというのも、そういうところから
出てくるんじゃないか、という感じがするん
です。

大下 入学生のとおり方ですが、スポーツに

励むような学生を積極的にとったほうがいい
のか、入学のときにはそういうことは考えな
いほうがいいのか、あるいはなにもスポーツ
だけじゃなしに音楽とかいろんな才能もあ
る。しかしながら、それはたとえば歴史学を
やるのとの関係があるのかとか、大学はそ
ういう才能とはあまり関係なく、まず人物と
いうことを中心に考えるべきだとか、いろん
な意見がある。同志社の多様性を生かしなが
ら、単に入試成績一本じゃないという考え方
をもっていったらいいんじゃないかと思っ
ているんです。

坂本 それと関連してですけども、女子
部にまだ生きている伝統で、デントン先生
が、「世界の中でいちばんいい国は日本で、
日本の中でいちばんいいところは京都で、京
都の中でいちばんいいところは同志社で、同
志社の中でいちばんいいところは女子部だ」
がありますね。ほんとに私はそう思って教育
を受け、いまもそう思って一生懸命やってい
る。それはよそからみると、ひとりよがりだ
すよね。いい気分なものだと思っただけ
けれども、それがいいとほんとうに教育はでき
ないと思っただけです。

出石 商学部の場合、専門の性質もありま

すから、いろいろの大学の卒業生の方が教員
になっていられるんですけども、ごく最近あ
った幾つかの例で、国立大学の教授として迎え
るという話があっても、同志社のほうが研究
条件がいいし行かないという人が数名出てい
るんです。予算とかそういう面から見ました
ら国立のほうがはるかにいいんですけども、
自分はこちらのほうがいいからという人
が出てきておりました、私のほうの学部へ入
ってこられて、途中でやむをえず出ていかれ
た方は三名ぐらいですが、ほとんどここに
いてやるといふことで、それは自分の研究が
自由にやれるということなんです。先ほどもい
ましたように、こういうことをしてはいかんと
かいわれないでやれる、そういう点が同志社
の中に生きているんじゃないか。それはキリ
スト教主義とかそういう形でいわなくても、
何かそういうものが背後にあって、自由に研
究できる雰囲気をつくっている。ただ、その
ことは逆にいうと、さっきいいましたよう
に、組織面でみて意思決定をするのがなか
か難しいという裏面の関係になっている面も
あると思っただけです。

大下 デントン先生の話があつたんですけれども、普、同志社には、この人はなんでもんなに同志社が好きなんだろうと思うような先生がおられたんですね。ぼくらの世代になるとだんだんそれが少なくなってきたんですけれども、いま出石先生いわれたように、そういう空気がまた出てきたわけですね。ただ、この間もある同僚と話していたんですが、同志社は京都という地の利もあって世間的によくなってきた。同志社の教員になれば、文字どおりここはよくて、べつによそへ行く必要もない。他方で、同志社全体を改革しようという意識も案外なくなってくる。そういう両面もあるということは自覚すべきです。

出石 私はいつも思っているのは、もうすこし人事交流があつてもいいんじゃないかという点が一つと、それから財政はもう少し総合財政に向かわなくてはいいんじゃないかという点と、もう一つは、将来に対する展望という点では、これももう少し総合的な目で考えなくてはいいのではないか。上からの一本という形は同志社になじみませんけれども、やはりそういう全体を見た中で的人事、財政、企画、この辺はもう少し考えなく

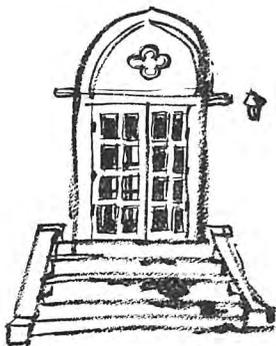
てはいいけない時代にきているんじゃないか、それをちょっと思いますので付け足しておきます。

幸 「同志社のバックボーン」というたいへん難しいテーマだったと思いますけれども、実際にどうしたらよいか、どこに問題があるかということでもかなりお話を進めることができましたかと思えます。こうしてお話し合いをしてみますと、同志社はいへんい歴史の遺産をもっているんですけれども、同時にまたいろんな問題も抱えているわけで、今後ともこうしたことをお互いにそれぞれの場をよく考えて、先輩たちが苦労しながらつくろうとしたものを受け継いで、新しい時代にあたえる学校にしていきたいと思えます。

(一九八六年八月六日収録、於有終館担当理事室)

この、座談会に出席された出石先生が、この後、まもなく(八月三十日)急逝されました。活潑に発言されていた先生の当日の御様子からは信じがたい思いです。座談会での御発言が、先生の同志社へのいわば遺言になったわけですから、心から哀悼の意を表するとともに、御遺族の上に神のゆたかなめぐみがありますよう祈ります。

(幸 日出男)



同志社教育

——立学の理念とその課題——

同志社は明治八年（一八七五年）に創設され、今年の十一月二十九日をもって創立一一一周年を迎える。校祖新島襄が「官許同志社英学校」の開校にあたって行った祈禱会に集った生徒が六名、授業に出席した生徒は八名であった。この一一一年という長い歴史において同志社は苦難に耐え、努力を重ね、とくに戦後、高等教育の大衆化と経済の発展に支えられ、今日二万有余の学生を擁する日本有数の私学として発展した。官尊民卑の思想に支えられた国立公立大学の優先意識は次第に動揺、混乱し、今や「私高国低」の時代を迎えつつある。いささか長文になるが早稲田大学神沢惣一郎教授が私立大学連盟発行の『大学時報』第一八九号（昭和六十一年七月）に述べられた巻頭言をここに引用する。

先に国立大学の入学試験日の大改革が行われた。これによって近年顕著になってきた入学試験における「私高国低」に歯止めがかかったとするむきもあるようだが、これは誤りである。なぜならばこの趨勢は共通一次の制定や入学試験日の変更などの、人為

浅 香 正

的措施によって生じたものではなく、まったく構造的なものであるからである。それは私立の各大学が粒々辛苦してすぐれた人材を社会に送り出し、今や各分野において国立大学を圧倒しつつある力をもつに至ったからである。驕りとおざなりの中で斜陽化するのには、ひとり国鉄のみではない。

この神沢教授の国立大学に対する痛烈な批判と私立大学が果している教育的貢献に対する自負の念に深い感銘を覚える。また最近ある進学予備校の調査によると、同志社大学合格の難易度は東京の慶応、早稲田、上智、国際基督教各大学について第五位にランクづけされている。合格の難易度の高低が必ずしも教育内容の優劣を決定する基準とはならないが、同志社大学の社会的評価が上昇してきたことを認めてもよいであろう。

しかし戦後における私立大学の量的発展は、大学の設置規準とも密接な関係を有するが、個性の喪失および立学あるいは建学の理念の希薄化をもたらした。それぞれの大学の特色が次第に失われつつ

ある。とくに最近における経済の低成長期に入るや、特色ある教育によって有能な人材を社会に送り出すような教育体制を整備、充実しない限り、高い社会的評価と信頼を期待することが困難な状況になりつつある。また同志社全体をみると、余りにも多数の学生と、多様な学校組織を包括しているため、個性ある同志社教育をどのように実施することが可能であるか、といった深刻な問題が生じてきたことも事実である。立学の理念はある歴史的社会的状況のもとに生れ、それによって教育体制が整えられ、その体制を通じて立学の理念が顕在化されてゆく。立学の理念はたとえある歴史的社会的状況のもとに生れたものであっても、時代を超えた普遍的価値をもつものであり、そこに私立大学の存在理由があると考えられる。この意味において改めて同志社の立学の理念を反省し、個性ある教学理念の確立に役立つことができればと願うものである。

新島研究への関心

わたくしはいわゆる新島研究者でもなく、また日本近代思想史を主要な研究領域としている専門家でもない。その意味で新島の教育理念など同志社教育の基本問題に発言する資格もなく、むしろ既に過去のそれぞれの時代に刊行された新島伝を繙く方が有益であろう。わたくしの同志社予科時代に教科書として用いられた森中章光氏の『殉国の教育者 新島襄先生の生涯』海外修学篇（昭和十七年）および教育報国篇（昭和十七年）の二冊（ただし教科書として用いられたのは海外修学篇のみだった）、魚木忠一教授の『新島襄

人と思想』（昭和二十五年）、和田洋一教授の『新島襄』（昭和四十九年）などは新島理解に対するいろいろな視点のあることを教えられた。また北垣宗治教授訳のJ・D・デイヴィス著『新島襄の生涯』（昭和五十年）は新島と一緒に同志社を創設したアメリカン・ボードの宣教師の立場からの新島伝記として非常に興味深く有益であった。さらに杉井六郎教授の『新島襄 人と思想』（私学同志社一九八六）昭和六十一年に所収）は簡潔であるけれども、新島の教育理念と性格を的確に述べた論説である。また創立百周年を記念して刊行された『同志社百年史』（昭和五十四年）通史編一、二資料編一、二を通観すれば同志社の発展を理解することができる。しかしわたくしが新島襄に一つの学問的興味を覚えたことがあるとすれば、日本近代化論との関連においてであった。アメリカ留学中に、日本研究を行っている学生や研究者からR・N・ペラー教授のTOKUGAWA RELIGION: THE VALUES OF PREINDUSTRIAL JAPAN, 1957（『日本近代化と宗教倫理』未来社、昭和四十一年）の通説をすすめられ、アメリカにおける日本研究がきわめて高い水準にあることを知って驚いた。これは既に二十年前のことであるが、帰国後、マリウス・B・ジャンセン編、細谷千博訳『日本における近代化の問題』（岩波書店、昭和四十三年）、武田清子編『比較近代化論』（未来社、昭和四十五年）などの諸著を通じ、日本における近代化がアジアの諸国と比較してきわめて順調に進んだ原因と経過に関し、新しい視点を与えられたことが新島に関するわたくしの関心の大きな原因であったかも知れない。わたくし達は封建社会と近代社会とを異質なものとして対極的にとらえようとする

が、アメリカやイギリスにおける日本研究者は封建社会の諸要素のなかに近代社会へと変革、転移しうる連続的諸要素のあることを強調し、そこに日本近代化の成功の秘訣があることを解明しようとしたのである。

新島は既に述べたごとく九ヶ年有余のアメリカ留学の後、帰国の翌年すなわち明治八年十一月二十九日に「官許同志社英学校」を京都の地に開設したのである。開設にいたる新島の抱負あるいは目的やその経過は既に多くの人々によって論述され、ここに改めて詳細に繰り返す必要もないであろう。新島の目的は最終的にはやはり大学を設立することであった。『同志社百年史』資料編一には設立の旨意に関する資料十一編が収録されている。最初のもは明治十五年に属するが、機会あるごとに訂正あるいは加筆し、その最終案が明治二十一年十一月の日付で「国民之友」はじめ全国の主要新聞、雑誌に発表された「同志社大学設立の旨意」である。新島の教育理念を理解するためには、かれの生い立ちや生活環境あるいは時代状況およびアメリカにおける留学生活と人間形成を研究する必要があるが、新島の人となりの根底に武士の子という性格があったと考えるべきである。

新島の人とたり

新島は天保十四年（一八四三年）上州安中藩板倉侯に仕える祐筆職民治の長男として生れた。父民治の勤めた祐筆職は下級武士の職責であったが、新島も幼少の頃より武士の家庭の子供として読書、

習字を学び、漢籍の勉強に励み、また藩主の命令で撃剣や馬術の稽古を行った。これらは武士の子弟には必要な教養であり、君主に対する忠義と親に對する孝行は封建社会の基本的倫理であった。しかしこれらの封建的倫理は社会的あるいは自己の内的変革を通じて他の超越者への恭順あるいは服従に転移しうるものである。新島はキリスト教徒となっても漢学に對するすぐれた教養をもち、かれの作詩は武士の子としての教養によつてはじめて可能であったと考えるべきであろう。またかれの教育における人間としての品位と精神の重視も武士の子として受けた社会的規範がキリスト者としての信仰生活によつて純化され、昇華されたこととみることができるのではなからうか。

新島がいつ頃、どのようにしてキリスト教に傾斜していったかを究明することは必ずしも容易ではない。かれは江戸においてまず蘭学ついで英学の勉強を行い、かつ『ロビンソン・クルーソー』のオランダ語訳からの和訳などの読書を通じ「天父」の存在を知っていたであろう。新島がアメリカから父民治にあてた最初の書簡（慶応二年（一八六六年）二月二十一日）の末尾に「小子神の加護によりてや甚だ健康にして日々学問修業仕をり候間何卒御安心可被下様奉願候此神は日本の木像金仏とは違ひ世界人間草木鳥獸をつくりし神にて永生不朽実に我等の尊敬祈禱すべき神なり」と述べている。これはフィリップス・アカデミー入学（一八六五年十月）後わずか四ヶ月、洗礼を受けた十二月三十日（三十一日の説もあり）より十ヶ月前のことである。従つて新島はアメリカに上陸（一八六五年七月）早々に実質的にキリスト教徒となつていたのである。

新島の教育理念

このように新島はキリスト教の信仰に深い確信を抱いていたが、日本においてキリスト教という字句を用いることにはきわめて慎重であった。上述の大学設立に関する諸旨意を通読すると、「基督教」あるいは「基督教主義」という字句をはじめて明確に用いたのは明治二十一年十一月の「同志社大学設立の旨意」においてである。基督教主義の学校運営がいかに当時きびしい社会的状況にあったかを推察すべきである。「同志社大学設立の旨意」は校祖新島の教育理念を明確に述べたものであり、同志社大学にとっては不磨の大典とも称すべきものである。そのことは毎年入学式にその一節が朗読されることによっても理解されるであろう。

この「旨意」は、一、国家の繁栄は一朝偶然によるものではなく教育によるものである。二、わが国における大学は唯一政府の手になる帝国大学があるにすぎないが、既にアメリカにおいてハーヴァード大学のごとく、すぐれた私立大学がアメリカの教育に大きな貢献をなしており、その教育の根底にキリスト教が存在している。三、キリスト教主義こそ、軽佻浮薄な外国文明の模倣や活力を失った儒教精神に対し、良心を手腕に運用する、自治・自立の人民を養成し、自個の運命を作為する人物の育成を目的とするものである。四、しかも国家の維持は二、三の英雄によらず、知識あり、品行ある人民の力によるものである。

以上が、新島が大学の設立にあたってかかげた教育理念である。

勿論、新島は同志社大学をもって基督教の拡張を意図するのではないか、という非難に対し、「抑も普通大学の目的たるや高等の學術を教授し、……社会万般の事業に適用する有為の人物を養生するに在るなり、彼の単に神官僧侶若くハ耶蘇宣教師等を養成して各自宗教の伝播を謀るは是れ宗教学校の任なり、今同志社が計画する所の者は普通大学にして世の所謂宗教学校にハ非らざるなり、……我大学の門戸は広く開け我大学の空氣ハ自由なり」(同志社大学設立の大意)明治二十二年と述べている。わたくしは時々ヴァティカン市国にあるサン・ピエトロ大寺院に行き、ミケランジェロの計画した大円蓋ケイボウの下部のところに、イエスがペテロに告げた言葉「*Petrus et super hanc petram aedificabo ecclesiam* mean et tibi dabo claves regni caelorum」(あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建て、かつあなたに天国のかがきを授けよう。)(マタイによる福音書、第十六章十八―十九節)が記されているのを見た。新島は日本においてペテロの役割を果したのである。新島は大学の設立をみず、業半ばにして「劣才縦之済民策尚抱社図迎春」の詩を遺してこの世を去った。

校祖新島の教育理念はそれぞれの時代の教育体制を通じて実現されるものであり、そこに大学の校風あるいは伝統が形成される。わたくしは前大学長木枝燦教授から同志社大学における中・長期にわたる教学体制について検討するよう諮問を受けた。答申は既に発表されているが、その中で同志社大学の校風として「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」三つの特色をあげておいた。勿論大学の伝統あるいは校風をいくつかの概念に固定することはかえって大学の

充実発展を拘束する危険もあるが、大学の教學理念を明確にし、個性ある教學体制を整え、広く社会に訴えることが大切であり、今後の同志社大学の発展に必要であると考えたからである。これらの特色を教學体制の中に生かすための具体的施策は答申に明示されている。わたくしは答申案の作成中に、かつての東京大学総長加藤弘之氏が新島の追悼会において行った講演を読む機会があった。「新島先生には実に動かすことのできない強い精神がありました。……私は先生がキリスト教徒であったという理由で先生をほめるつもりはありません。私が先生をほめるのは、あのおの精神の故でありまして、これは宗教、学問、政治、商売、その他どのような職においてもなくてはならないものだからです。……日本人が伶俐であればこそ二十年、三十年の間に西洋の文物を採用して今日までの発展をとげたのです。伶俐ということとはまことによいことではありませんが、それだけでは力が弱い。(新島先生は)不撓不屈の精神を貫いて、ついに同志社大学をたてるまでに至りました。これは伶俐のみのできることでありません」(『新島襄の生涯』一四五—一四七頁)。わたくし達に必要なものはこの伶俐な術策よりも新島が自ら示した良心から発する不撓不屈の精神ではないかと思う。

校祖新島が救国の情やみがたく、国禁を犯してまで海外留学の壮志を実現し、今日の同志社の基礎をつくったその情熱と意志の強さに対してばかりでなく、わたくしは一人の歴史家として新島がもっていた明日の世界をみる鋭い歴史的感覚に深い尊敬の念を抱くものである。※「中・長期教學検討委員会答申」(同志社大学広報臨時二六五号、一九八六・三・三十一)

(大学文学部教授)

新島襄関係文献(抄)

「新島襄全集」全十卷(刊行中)	同朋舎出版
A. S. HARDY, LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA	同志社大学出版部
「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意」口語改記並原文」	同志社
森中章光編「新島先生書簡集」正・続	同志社
同志社編「新島襄書簡集」一岩波文庫	岩波書店
J・D・テイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」	小学館
「新島先生記念集」	同志社校友会
「明治文学全集」第四十六卷「新島・植村・清沢・綱島集」	筑摩書房
J・D・DAVIS, JOSEPH HARDY NESIMA	同志社
森中章光著「新島襄片鱗集」	丁字屋書店
森中章光著「新島襄先生詳年譜」	同志社・同志社校友会
永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」	同志社大学出版部
徳富蘇峰著「新島襄先生」	同志社大学出版部
魚木忠一著「新島襄一人と思想」	同志社大学出版部
岡本清一著「新島襄」	吉川弘文館
渡辺実著「新島襄」	同志社
同志社社史史料編集所編	同志社
「同志社百年史 通史編Ⅰ・Ⅱ」	同志社
「同志社百年史 通史編Ⅰ」	同志社
和田洋一著「新島襄」	日本基督教団出版局
雑誌「新島研究」	同志社新島研究会

栄光ある荆棘の歴史に学ぶとき

石 田 章

「同志社大学設立の旨意」の中で新島襄は、草創期の同志社が、官学ではなく私学であるがゆえに、そして、その教育理念の基本をキリスト教主義の徳育におくがゆえにたどらざるをえなかつた苦難の道程と、新島自身がその時期身をもって体験した孤独な心情を次のように綴っている。

吾人が世の教育家と其趣を異にしたるも茲に在り、而して同志社が数年荆棘の下に埋没したるも亦た茲に在り、此時に際して、吾人の境遇ハ実に憐れむ可き者にてありしなり、茫々たる天下実一人の朋友なき有様にありしなり、基督教主義の徳育ハ、独り愚民の爲めに嫌悪せらるゝのみならず、又た世上の大人君子よりも非常なる冷遇を蒙りしなり

「同志社大学設立の旨意」を読むたびに、私は、とりわけこの一節に特別の感慨を覚える。新島の掲げる高い教育的理想と、その実現をはばむさまざまな冷たい現実との狭間にあって苦悩し戸惑う人間

新島襄の卒直な姿が行間に浮び上って見えてくるからである。新島は祈りの人であった、とよく言われる。私には、新島が神に祈る姿を想うとき、新島のこの孤独な姿がしばしば重なり合つて見えてくるのである。

中央の官界、財界にこれといった人脈をもたぬアメリカ帰りの三十三歳の一青年が、中央を遠く離れた京都の地に私学を、しかもキリスト教にその教育の基本をおく私学をつくる、ということの困難はおよそ想像を絶するものであったに違いない。まさに徒手空拳の戦いであつたと言つべきで、新島がよりうるものはただひとつ、その高い理想と新島襄という優れた全人格のみであつた。

新島襄がこの「旨意」を発表したのは明治二十一年十一月のことだが、それから九十年後、今は亡き元同志社総長上野直蔵は、その著『同志社百年——その前後』の巻頭に次のように記している。

人間が人間であることのもっとも大切な部分の教育は、どうしても即応的な国家目的に順応する必要のない私学にまたなければな

りますまい。まさに同志社百有余年の営為は、そのような教育姿勢の満身創痍の試行錯誤の歴史だったといつてよろしいでしょう。

これら「茫々たる天下実一人の朋友なき有様にてありしなり」という新島の嘆きや、「同志社百有余年の営為はまさに満身創痍、試行錯誤の歴史だった」と言う上野の言葉には、奇麗ごとではない、実に聞く者の胸をうつ実感がこもっている。私学同志社の百年の歩みは、決してカッコよいものではなかったのである。

私自身、かつて同志社の学生であった頃、国立大学に進んだ先輩や級友からすれば、私などは「なんだお前、ドーヤンか」でしかなかった。「ドーヤン」というこの呼称は、京都ではむしろ一種の親しみを込めた意味あい使われる、とその後聞いた。しかし、少くとも私のような地方の出身者にとっては、それはやはり軽い軽侮をこめた呼び名でしかなかった。今でこそ同志社は、並の国立大学など及びもつかぬくらいの高い評価を享受しているが、ほんの二、三十年前までは、一般社会の同志社を見る眼はそんなものだったのである。その根底には、官をもつて尊しとし、中央にあるものはずべてよしとする戦前から続いてきた片寄った価値観が、牢固として存在していたからである。「独り愚民の為に嫌悪せらるゝのみならず、また世上の大人君子よりも非常なる冷遇を蒙りしなり」と新島が慷慨した状況は、実に同志社の長い歴史のほとんど大半を占めていた現実だったと言つてよいのである。数多い日本の私学の中でも、同志社ほどに、さまざまな意味で、いわれなき冷遇や圧迫を受

けてきた私学はないと思われる。同志社の歴史は、そういった故なき冷遇や圧迫への有形無形の抵抗の歴史でもあった。そして、その長い満身創痍の、ある意味ではきわめてぶざまですらあったそのいばらの歩みの中から、同志社のなにかが——それをしもバックボーンと言いうるのならば——まさしく同志社のバックボーンが、培かれてきたのだ、という気がする。

この原稿をしたためているいま、テレビは土井たか子氏の社会党委員長就任のニュースを大きく伝えている。わが国の憲政史上初の女性党首の誕生が画期的なことなら、そのひとが同志社出身者であるということも、同志社の長い歴史の上で特筆すべき出来事と言つてよいだろう。

昨今でこそ、政界や財界のトップで活躍する著名な同志社出身者は少なくないが、戦前の同志社人で、政・財界で名を成したひとの数は、たとえ東の早稲田や慶応に比べて決して多いとは言えない。このことは、同志社が関西の京都にある、ということにもひとつの要因があろう。官学に対して同じ在野の私学と言つても、わが国の政治・経済の中枢機関の多くが集中する東京にある早稲田や慶応が、多かれ少なかれ時の国家体制に敏感に即応する人物を生み出してきたのは至極当然のことで、早・慶両校と同志社の生んだ人材分布を比較すれば、その辺の事情は歴然としている。大ざっぱに言つて、早稲田が政界に、慶応が財界により多くの人材を送り出したのに対して、同志社は宗教、教育、社会事業といったどちらかと言えばきわめて地味な分野に人材を送っている。とりわけ戦前・戦後を通して、同志社が最も誇るべきは、社会福祉や社会改良運動とい

ったいわば社会の底辺を支える分野に傑出した人材を輩出してきたという事実であろう。安部磯雄、山川均、高畠素之、山本宣治といった社会主義者や労働運動のすぐれた指導者たち、徹底した非戦論で知られる柏木義門、救世軍の山室軍平、廢娼運動の湯浅治郎、監獄改良運動の留岡幸助、救癩事業の井深八重子、さらには、金子尚雄、小塩高恒、尾崎信太郎、八浜徳三郎、有馬純彦、高橋元一郎、緒方庸雄、中村遙、脇田悦三、等々、社会の底辺や陽の当らぬ場所でも苦しむ人々への保護救済運動の先駆者たちを、すでに明治の半ば頃から同志社は続々と世に送り出しているのだ。これらの人々は、日本の政治や経済を直接支配するような政界の巨頭でもなければ財界の大物でもない。むしろ逆である。言ってみれば、彼らはすべて、強者の側ではなく、あえて弱者の側に立った人たちである。時の政治や経済が切り捨て、かえりみない社会の裏街道に足を踏み入れ、そこに苦しむ人たちに手を差し伸べた人たちである。長い弾圧と差別の歴史を経て、戦後ようやく実を結びはじめた労働運動や社会福祉への道は、これら先人たちの地道な、しかし不屈の闘志と血のにじむ努力とによって切り拓かれていったのである。同志社はそういういわば次の時代の糧となるような先駆的役割を果たした人物を数多く生んできたのだ。

同志社がこういった人材を数多く生んできた背景には、もちろん新島襄以来、いわゆる立身出世や栄達の道を拒むいわば反権力主義とでもいえるべき伝統的姿勢が一貫して流れていたからであろう。明治七年、アメリカから帰朝した新島を時の明治政府は三顧の礼をつくして迎え入れようとする。しかし新島はそれを固辞し、キリスト

教主義による私立学校の設立に自からのすべてを賭ける。時の政府の招きに応ずる方が、はるかにつとより早い栄達への道であることは解りきっている。しかし新島はあえてその道をとらなかつたのである。同志社人の生き方の基は、この新島自身のあえて世の「地の塩」たらんとする道を選んだ、その生き方そのものによって定められたと言っても過言ではなからう。

同志社の歴史を辿ってみると、とりわけ戦前・戦中の時代においては、同志社がその特色として標榜してきたものは、不利にこそなれ有利に働くものではむしろなかつた。同志社教育の柱であるキリスト教主義をはじめとして、自由主義、自治主義、平民主義、そして国際主義等、すべてそうであつた。戦前・戦中の日本にあつては、これら同志社の立学の精神ともいうべきものはすべて、国粋主義、軍国主義、統制主義といった国家の進路や方針に真つ向から対立するものでしかなかつた。同志社がその教育の根本にキリスト教の理念を置くがゆえに、戦前・戦中の信教・思想の国家統制の下にあつて、その教育と経営にいくに多くの犠牲を強いられてきたか、そのおびただしい苦い事例を私たちは今もなお生々しく記憶にとどめている。このキリスト教主義ひとつをとってみても、戦前・戦中の同志社は、一般の他の私学とは比べものにならない大きな社会的ハンディキャップを背負つて歩んだことになる。

同志社のもつ大きな特色であり伝統でもある国際主義もまた同様であつた。同志社の国際主義の原点もまた新島襄その人にあることは明らかならう。明治初期の時代にあつて、十年余の長期にわたつて海外で生活し、アメリカの一流大学に学んで帰朝した新島は、お

そらく当時の日本における最高の国際人であった。同志社の国際主義は、学校の経営政策とか、時代の流れに乗った最近流行のいわゆる海外交流とは本来いささかその趣を異にしているように思う。いわばそれは、新島襄を通して自然に身につけてきた国際性あるいは国際感覚とでも言うべきもので、創立以来同志社では、外国人との接触がなにも特別なものではなく、ごく自然に日常的な形で行なわれてきたのだ。同志社の人たちが抱えてきた外国人、とりわけアメリカやアメリカ人に対するごく自然な親近感、戦前の日本では少数のミッション系の学校を除いて、ほとんど例がなかったものであろう。それだけに、米国が敵国となってしまった不幸な時期の同志社に対する強い風当りは、これもまた他の一般の私立学校が経験することのなかった苦しみであったと言える。

そうしたことを思うにつけ、第二次大戦最中、戦時下日本にとつてはまさに敵国人以外のなものでもないミス・フローレンス・デントン、同志社があらゆる手を尽して守りぬいた事実、私は強い誇りと感動を禁じえない。ここに同志社の国際主義の、そしてさらには同志社という私学の、真骨頂を見る想いがするからである。

この戦時下の日本でデントンを守りぬいた背景には、当時の総長牧野虎次や女学校々長末光信三の時流におもねぬ見識と、それに裏打ちされた老練な方策があったことは言うまでもない。しかし、同時に私は、デントンと終始起居を共にしながら、文字通り身をもって彼女を守った星名久や中村貢のような人たちに、同じくらいに深い敬意と誇りを覚えすにはいられない。彼らの中にこそ、時代と國を越えた深い人間愛に基づく真の国際主義が貫ぬかれていたと思え

るからだ。

一國を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一國を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民ハ一國の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人ハ即ち此の一國の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す

新島襄のこの教育思想は、きわめて遠大なものである。一國の良心ともいふべき人材とは、本来それ自体は、地味で、あまり目を奪うような存在ではないであろう。しかし、そうした人材が、一人また一人と増え、代をなし、何時しか世に満ちる時を、そういう未来を、新島はじつと見つめていたのに違いない。新島が、同志社教育の完成を二百年の将来においた最大の意味はここにある、と私には思える。

同志社はいま、その新島が描いた二百年のまさに中道にある。同志社二百年の前半生は、実に苦節百年の歴史であった。いま同志社は、田辺キャンパス開校という、その歴史の中道を飾るにもっともふさわしい船出をもって、その後半百年の歩みを始めたのだ。まさしく第二の草創期とも呼ぶべき時であつて、この時に、われわれは、「満身創痍、試行錯誤の歴史であつた」過去百十年の蹉跎の中に、そう、その誇るべき蹉跎の中にこそ、これからの百年を生きるための真の指針を、今いちど見出すべきである、と私は思う。

(女子大学教授)

同志社人の「弱さ」

八木 亜 夫

新聞記者という仕事柄、毎日のように外を歩いて人に会う。しばしば同学の諸兄弟にも出会うことになる。

ここ八年ほどインタビュアーの連載コラムを担当していて、どういふものか同志社出身の人物を取り上げることが多い。エコひいきではないか、と冷やかし半分になじられたりするが、これはまったくの偶然で、もとより他意はない。インタビュアーの相手を選ぶのに、いちいち出身校を吟味するなどという面倒なことは、していられない。たまたま興味を持って、会いたくなり、話してみたら、おや、あなたも同志社ですか、といったことなのである。それでも、相手が同学とわかると、初対面でも気が楽になり、すぐうちとけて、仕事はやりやすい。しかし、あまり出身校が偏るのも好ましくないの

で、近ごろは少し気をつけるように心がけている。いくら精を出して人に会うといつても、数は知れている。実際に会った、限られた数の人たちの顔を頭に思い描き、世の中全体を見渡してみても、改めて気がつくのは、同志社出身者には、どうも度外れた大物が見当たらないことである。

もちろん、どの分野でも石を投げれば当たるほど、同志社出身の人材は行き渡っている。そして相当に重要な地位を占め、その業界では知らぬ人となない活躍の人物は、数えきれない。感嘆するほかない指導力と影響力を保持しつづけている、著名の士もむろん十指に余るだろう。これらの人々の懸命の努力と業績が、同志社の名声を高からしめている事實は、何人も否定できない。

だが、例えば政界を見ても、古い昔は知らず、現今の首相や閣僚、派閥のリーダー、黒幕、そのいずれにも、ついで同志社出身者の顔はないようである。ない、と断定する自信はないが、あるとすれば、それはかなり珍しい存在だ、とは言えるだろう。このたびの土井たか子社会党委員長の誕生は、同志社にとっては、まことに慶賀にたえぬ、希有のこととなる。日本初の女性政党党首が同志人であることを、私もまた、誇りに思うものである。

それはそれとして、なぜ政界の大物に同志社出身者が少ないのか。ここからは全くの私見であるが、簡単に言ってしまうと、同志の諸氏は今の政界で名を成すには、人がよすぎるのである。政治家

をひとまとめにして悪口を言うのは本意ではないが、現下の日本の政界は、政治家本来の資質よりも、金力を基礎にした世渡り上手が、幅をきかせている。相次ぐ汚職事件を引き起こしておきながら、政界浄化、政治倫理の確立は、なおざりもいいところだ。ただ己れの立身をはからんがための権謀に、政治家たちは腐心しているように見える。「良心」はしばらく置いて、もっぱら「手腕」ばかりが問われる場では、同志社精神は、どこか弱々しい。

政界に限らず、どの分野でも多かれ少なかれ、このような風潮はあるから、どこにいても、同学諸氏は最後の土壇場でエゲツナイことができないでいる、のではないかと私には思えるのである。俗に、人の足を引っ張る、というのが、そのところが、どうもやりにくい。少しはやってみるが、中途半端なものだから、とどのつまりはひっくり返されてしまうことになるのではないか。

私が会った同学の人々は、どなたもやさしい、品のいい方ばかりだった。生き馬の目をぬくような業界で、タフに生き抜き、活力の塊のような人にも、どうかすると、ふっと「人のいい」ところが見える。そのたびに私は、ああ、この人もやっぱり同志社だ、と思う。だが「人のよさ」は、人間格闘の現実の中では、しばしば「弱さ」になりかねない。複雑な人間関係を巧みにさばいて、たとえ他人を踏み台にしても自我を押し通すためには、いささかの酷薄さも持ち合わせなければならない。いつも「いい子」のままで、果実だけをとっていただくという甘いことは、なかなか通用しないのである。

私の観察したところでは、やはり官学と私学の違いが、歴然としてある。血も涙もない、といった手合いは、どうも官学出身者に多

いように思える。少なくとも、仕事の場では血も涙もないことがむしろ必須の美德であり、それができないのは即落伍者である、と考えている人が、官学系には多い、と言ってもあながち失当でもないように思えるのである。私学系は、いいところまで行きながら、最終的なせり合いで、たくましく欠けるきらいがある。これは、東大支配の官界に象徴される官学偏重の一般の傾向と無関係ではないにしても、それはまた別の話である。

よく言えば、私学の人はいせせこせしたところがなくて、のんびりしている。魅力的な人柄も多い。その代わり厳しさがいささか足りない。概括的に言ってしまうと、そんな印象である。

業界によつては、特定の大学出身者がひとり大きな顔をしているところもあるが、新聞社ではそれがほとんどない。私が在籍する新聞社では、どの記者がこの大学を出ているかは、酒席の笑い話にしかならない。数からいえば、他の新聞社と同様、早稲田大学出身者が圧倒的に多いが、早大閥があるわけではない。社内に何々大学同窓会のたぐいがあることはあるが、ほとんどが休眠団体で、活発に氣勢を上げた話は聞いたことがない。要するに、出身校のことなど、だれも気にしないのである。私の新聞社では、記者を採用するにも「学歴不問」である。

そんな所で長い間暮らしてきたから、出身校については、だいたいが鈍感になってしまっている。まことに申し訳ないことだが、母校愛のほうもおろそかになっていて、同志社精神とは何か、の答案も充分には書きかねるていたらくである。こんなに横着な者でも、たまたま同学の人に会つと、「同志社」を感じさせられるのだから、

やはり我々は、同志社から与えられた多くのものによって形づくられ、それを負って生きているのだろうか。

私自身は、高校で四年、大学で五年（ノ）計九年間も学んだ。高校は夜間定時制の、いまはもう廃校になった、同志社商業高校で、そのころ同志社は勤労生徒の教育に熱心だったのである。これがまことにユニークな学校だった。第一に生徒の年齢がバラバラで、すごいオッサンのような人もいる。みんな昼間は職業を持っていて、室町の織維問屋の店員や、瓦職人、看護婦、警官もいた。先生のうちも、本職は別、という人が多かった。錚々たる教授も大学からかけつけて、昼間の疲れですぐに居眠ってしまう生徒に、熱のこもった、ずいぶんむずかしい講義をされた。

夜間高校の気楽さからか、授業の内容はかなり先生の好き勝手な、国語の先生は白楽天の「長恨歌」ばかり延々と朗読し、世界史は、その先生の専門とかで、いつまでたっても中国の「五四運動」の話ばかりだった。宗教の先生は、ヤハウエとは何か、を説いて熱弁をふるい、文字が黒板からはみ出した。

いまだでは想像もつかないような、いわば自由学園のような、この夜間高校の体験は、私にとって決定的なものとなった。おかげで、いまでも長恨歌はなんとか暗唱できるし、魯迅のことも人並みにはわかる。旧約から説き起こされたために、キリスト教精神の根幹を知るきっかけもつかめた。それに何よりも、さまざまな職種の人と机を並べて学んだことが、大きかった。近ごろは、世の中へ出て行くことをなるべく遅らせて、そのために留年したり、いつまでも定職につかず、ブラブラしている若者が多いというが、私などはむしろ

その気分がわからぬでもないのである。高校生が、世の中はつらいものだ、と知ってはなおさらのことだった。ただ、私たちのころは、すぐアゴが干上がったってしまうので、ブラブラしたくてもできなかっただけである。

私自身はついに信仰を得るにいたらなかったが、友人達はつきつぎに受洗した。神学部へ進む者もいた。大学で、新島精神復興のりバイバル運動に熱意を燃やす者もあった。私のものの考え方の基本には、こうしてごく自然に、キリスト教精神が大きな場を占めることとなった。ほんの一例だが、靖国神社や地鎮祭の問題について、神道を風土的習俗とみなし、あいまいなあたりで許容しようとする説には、私はどうしても得心がいかない。外交や軍事など、この問題のかかわるところは複雑かつ重大だが、私はもっと根本的なところで、毅然としないのである。自分でもやや片意地だと思わぬでもないが、このこだわりには、やはり「同志社」があるようだ。

いつだったか、栄光館のチャペル・アローカアッセンブリー・アワーで、徳富蘇峰と賀川豊彦の講演と説教を聞いたことがある。蘇峰の話の内容は覚えていないが、長い白髪に大きな杖をついたこの巨人は、なぜか学生を前に相好をくずして、上機嫌だった。豊彦のほうは、火を吐くような説教で、学生の中には泣き出す者までいた。もう目がすっかり悪くなっていて、天眼鏡で賛美歌の本を見ながら、歌詞の意味がわからなくなるからオルガンはやめろ、と怒鳴って、奏者を困らせた。日本がなにもかもアメリカの下風にあった時代だったが、豊彦は、アメリカにも天国アメリカと地獄アメリカがある、と説き、ついでに、人糞を捨てずに乾燥して再利用する、

という珍妙なアイデアを披露した。

歴史に大きな足跡を残したこれらの人物に、若いうちに会える機会をつくってくれた大学に、感謝のほかはない。実物には会えなかったが、繰り返しその人のことを考えさせられたのは、やはり新島先生だった。まず、新島の遺品の中のオランダ語の学習帳を見て、明治人の迫力に圧倒された。国禁を犯して出国するなど、いったいなんというエネルギーなのだろう、と感じ入った。

それよりも、当時最高の新知識として帰国した新島が、政府からの要請を断って在野に徹し、もっぱらキリスト教教育のために、全力を傾注したところが、この際大事なポイントである。新島の残した仕事のどこにも、立身や榮譽とのかかわりが見えない。金のことでは、一生苦勞のしつづけだった。見えるのは、自身の理想に向かって、ただひたすらに燃え上がる情熱のほむらのようなものばかりである。大仕事をなしたげた明治の人は、みなそれぞれに魅力ある個性の持ち主だが、身を立って名を挙げることが、そのまま新しい時代を作り上げることと一致していた点では、おおむね共通している。その中で新島の生き方には際立った違いがあったといえよう。

さまざまな人に会い、自身の青春も遠く去ったあとで、私には初めて、新島が何をめざしていたかが、わかるような気がする。それは、良心を手腕に運用して人に尽くすにしても、名利を捨てて、真に地の塩たることこそが、何にもまして高貴である、とする信念ではないだろうか。

おそらく、大学がそこに学ぶ者に与えるものは、単に校祖がだれであるか、ということだけではあるまい。日常に教えを受けた先生

のひとりひとり、友人のだれかれ、キャンパスの雰囲気などの複合的な効果が、人を作り上げるのだろう。県別性格判断や血液型運命論の愚をおかさないためにも、あまり校風によって人をあれこれ識別するのは、やめたほうがよい。

それでもなお、新島の理念は世々代々受け継がれ、いまま学園に微妙かつ濃厚に生きつづけているのであろう。その空気を吸ってきた者は、とことん酷薄にはなりきれないのではないか。私は、同志社人の一種の「弱さ」のなかに、「新島効果」とでもいいたいものを見る。そして、これを言うところんだ曲解を招きかねないから、口には口にせぬことにしているが、その「弱さ」こそが、時に真の「強さ」であることを、この複雑怪奇な現実の種々様に照らして、ひそかに信じているものである。

卒業式の式場に掲げてあった英文の聖句を、いまでもよく覚えてい。「行け行け平和に。靈妙なる御手、汝を導かん」。えらそうなことを言っただけでも、卒業以来ただ無我夢中で生きてきたに過ぎない。ジ・インビジブル・ハンドにどう導かれたのか判然としないが、とにかくいま、こうしてここに在る。同志社精神のなんたるかを、深く思うこともなく、自らがそれから受けた恩恵に感じることもなく、うかうかと消光してきた。改めて自らの在りようの源泉を問われても、とまどうばかりである。

こんなありきまでは、ヒゲの新島先生にじつとにらまれては、ひとたまりもない。おかしなことを言うと言われるかもしれないが、年とともに新島先生がこなくなってきたのである。

(昭和三十四年大学文学部卒業・毎日新聞編集委員・論説委員)